横光利一「夜の靴」の空所
――「あの大きな東京」と不通線

野中　潤

近代日本の首都東京は、一九二三（大正12）年九月の関東大震災によって壊滅状態となり、一九四五（昭和20）年三月十日の大空襲およびその前後の断続的な空襲によって再び灰燼に帰した。したがって一九一六（大正5）年に上京して文学活動を開始した横光利一は、焼け野原となった東京を二度にわたって目の当たりにしていることになる。『夜の靴』を読むと、「五月二十四日の空襲のときは群長として役目をすませ、私でも町会から十円の賞を貰って東京を立った」とあり、横光利一は、三月十日の東京大空襲やその前後に何度となく繰り返された空襲を間近に体験していたはずであることがわかる。冒頭から三つ目の節にも、敗戦後の不如意な疎開生活を嘆く妻に対して、「東京にいたときのことを思いなさい。あれよりはまだましだ。」とたしなめる場面が描かれている。夫婦で病気になって起き上がることが出来ず、子どもたちだけを防空壕に避難させて空襲の恐怖に耐えた夜の出来事を回想する場面である。関東大震災の廃墟の中から出現した新感覚派文学の旗手は、帝都復興と歩調を合わせるように文壇での地位を固め、やがて文学の神様へと上りつめ、焼け野原から復興した帝都東京が二十年余りで再び灰燼に帰した中で「夜の靴」を書いた(1)のだ。もちろん、「夜の靴」があくまでもフィクションとして書かれているということを忘れてはならないが、「横光利一」「川端康成」「小林秀雄」などの名前が登場する「夜の靴」が虚実皮膜の間（あい）で受容されるべき、実体験を下敷きにした創作物であることも確かであ

る。阪神淡路大震災が起き、地下鉄サリン事件に首都東京が震撼し、ウィンドウズ95が登場した一九九五年からまもなく二十年。早くも二十年である。敗戦を断絶の相においてのみならず連続の相においても見るというのであれば、たかだか二十年余りの径庭しかない震災後と敗戦後の連続性に眼差しを注ぎつつ、横光利一の軌跡をたどることも必要である。そしてそれは、七十年近い時を隔てて、二十一世紀のもう一つの震災後にも繋がっている。

そういえば、この村の人たちも空襲の恐怖や戦火の惨状というものについては、無感動というよりも、全然知らない。このことに関して共通の想いを忍ばせるスタンダアドとなるべき一点がないということは、今は異国人も同様の際だった。たしかに、知らせようにも方法のない村民たちと物をいうにも、も早や、どうでも良いことばかりの心の部分で、話さねばならぬ忍耐が必要だ。この判然と分れた心の距離、胸中はっきり引かれた境界線というものは、こちらには分っているだけで、向うには分らない。人情、非人情というような、人間的なものではなく、ふかい谷間のような、不通線だ。農民のみとは限らず、一般人の間にも生じているこの不通線は、焼けたもの、焼け残り、出征者や、居残り組、疎開者や受入れ家族、など幾多の間に生じている無感動さの錯綜、重複、混乱が、ひん曲り、捻じあい、噛みつきあって、喚わめきちらしているのが現在だ。

茂木雅夫が「敗戦直後の人々どうしの「不通線」すなわち通じあわぬ所に対処すべく、新たな道を実体的に描きだしている」(2) 小説として『夜の靴』を論じて以来、繰り返し言及されてきた一節である。たとえば、「個別の戦争体験から生れた様々なる〈敗戦〉は、共同体験に収斂させることができない〈不通線〉をそこに孕んでいる」(3) と述べた黒田大河や、「「私」にとっての「不通線」とは、「私」の現在の心境を理解する者は皆無だという、他者との共通理解の不可能性」(4) だとする西尾宣明は、「不通線」という言葉の中に共約不可能な体験の偏差や他者との了解不可能性を見出している。一方で、「敗戦の混乱の中でばらばらになった人々の心」を見つめながらも「絶望の中に希望が、混乱の中に秩序が、変化の中に不変が、という構造」(5) を指摘した玉村周や、人間の相互理解や表現という位相に関わるものとして「不通線」を捉えつつ「芭蕉とヴァレリーを横光の内奥で結びつける架け橋」(6) であるとした日置俊次は、「新たな道」を見出そうとした茂木雅夫と同様に、「不通線」という

言葉を可能な限り肯定的な相において受け止めようとしている。これらは、引用部を含むパラグラフの末尾、すなわち「間もなくこれは絶望に変るだろう。次ぎには希望に。」において、「絶望」に焦点を合わせて読むか「希望」に焦点を合わせて読むかの違いであると言ってよい。そしておそらく、「不通線」に「希望」や「秩序」や「架け橋」を見出すのは、「戦後」を断絶の相において捉え、日本の再出発に横光利一の歩みを重ねてみようとする論者の願望のあらわれである。一方、「不通線」を否定的なものとして捉えるのは、相互理解の困難や表現の困難といった、敗戦後という時空を越えたところにある抽象的な領域へと問題を昇華することによって、不幸な形で生涯を終えることになる横光利一の敗戦後に何とか意味を与えようとするモチーフによるものである。いずれにしてもそれらは、「夜の靴」の世界に即して「不通線」を受け止めようとするものであると言うよりは、一般的、抽象的な領域へと問題を遷移させようとするものであると思われる。敗戦後を生きる人々の間の相互理解の困難や、周囲の農民たちと「私」との間の相互理解の困難として捉えるとしても、その態様をもう少し子細に見極める必要があるだろう。

したがって、「不通線」という言葉が登場する直前に、「東京にいたときのことを思いなさい」と妻をたしなめ、空襲の夜を想起した上で次のようなやりとりをしたことが記されていることを見落としてはなるまい。

「とにかく、自分の家が焼けなかったということは、何より結構じゃないか。あの大きな東京は、もうないのだからね。お前は見ていないから、知らないのだよ。」と私は云った。

「そうね、あたし、知らないんだわ。それだからね。ぶつぶついうの。」

妻はさしうつ向き、よく考えこむ眼つきである。

疎開する時期のわずかな違いが、「私」と妻との間に「不通線」を出現させている。「あの大きな東京」がなくなってしまった後の光景を妻は知らないのだ。「あの大きな東京」自体を知らない「この村の人たち」との間の「不通線」とは異なる位相で、「私」は妻との間の共通体験や共通理解の不可能性に向き合っていることになる。もちろん「あの大きな東京」の惨状を赤裸々に描くことは困難だった。「夜の靴」は、十重田裕一が明らかにしている（7）ようなＧＨＱによる検閲を受けざるを得ない敗戦後の言語空間で発表されたものだからだ。しかし妻の「よく考えこむ眼つき」に誘発され

る形で、敗戦後の東京の読者の脳裡には、焼け野原となった首都の光景が浮かんだはずである。「あの大きな東京」がなくなってしまった後の光景は、「この村の人たち」や妻の「知らない」こととして、山形県の山村の風景とは対極の位置に幻視されるという迂路を通してのみ提示されているのである。

次の場面なども、「夜の靴」における東京の描き方を考える上で見落とせない。

夜、家人がみな寝てしまったころ、長男がひょっこり東京から帰って来た。自家の畑で採れたさつま芋をリュックに一杯つめていて、ひどく疲れている様子だ。今年初めて採れた畑の芋なので私は袋の口を開け、芋の頭を一寸撫でてから寝た。

「どうだった東京。」妻は起きてきて子供に訊ねた。

「面白いよ、ジープがぶうぶう通っている。」

「餓え死にしてる人、沢山いて？」

「そうだね。僕、朝からピアノばかり弾いていて外へなんか出なかったから、分らない。」

「つまらないこと、東京のお話たったそれだけね。」

私と妻は、東京から来た客ということだけで、子供まで別人になったように見ている人間に、いつの間にかなっている。

妻と「私」とのやりとりを位相をずらして反復するように、夫婦と長男との間に「不通線」が出現している。「ひどく疲れている様子」の息子がいた東京は明示的には描かれていないが、「ジープ」や「飢え死」という語が現実と切り結ぶ場所に、読者がそれぞれの敗戦後を見出しうる余地が与えられている。そのうえ、「朝からピアノばかり弾いていて外へなんか出なかった」という長男と東京との間にも、「不通線」があることが暗示されているのだ。

じつは長男は、「私」よりも早く、妻と一緒に疎開していたわけだから、敗戦時には「あの大きな東京」がなくなったことを知らなかった。しかし、山形で代用教員をして得たお金で一時的に東京に帰ったことによって新たな「不通線」を抱え込むことになったのだ。引用の場面よりも六つ前の節に、初めて手にした給料袋を見せる長男に「お前その月給何に使うんだい。」と「私」が訊ねる場面がある。長男は、「僕これで東京へ帰るんだよ。早く帰って、ピアノ弾きたいなア。いいでしょう、さきに帰ったって。」という脳天気な答えを返す。

「ああ早く、ピアノ弾きたいなア。」
と子供はそんなことを仰向きに倒れてまだ云っている。
「明日東京へ行ったらいい。」
「ほんと。嬉しいなア。ああ嬉し。」子供は蒲団を頭からひっ冠り、すぐまたぬッと頭を出すと、
「お母アさん、パパ東京へ明日行けって、いい、行っても？」まるでまだ子供だ。

このときの長男と、先ほどの引用部に描かれている「ひどく疲れている」長男の様子との落差の中にはやはり、東京に行ってきたことによって新たに引かれた「不通線」が見出せる。長男の口数が少ないのは、肉体的な疲労によるものというよりは、東京での自らの体験が共約不可能であることを感受してしまったがゆえのものであると考えた方がよい。
このような観点から読み直すと、東京の自宅の一室に寝込んだまま子どもたちを防空壕に避難させた夜の様子をユーモラスに描いた場面にも、物理的な空間の隔たりが共約不可能な体験の偏差を生み出す契機となることの暗示があると思えてくる。

私は四十度も熱のある妻の傍へ、私の部屋から見舞いに出て傍についていたが、照明弾の落ちて来る耀きで、ぱッと部屋の明るくなるたびに、私は座蒲団を頭からひっ冠り、寝ている妻の裾へひれ伏した。すると、家の中の私たちのことが心配になったと見え、次男の方がのこのこ壕から出て来て、雨戸の外から恐わそうな声で、「お母アさん。」とひと声呼んだ。
あまり真近い声だったので、「こらッ。危いッ。」と座蒲団の下から私が叱りつけた。子供は壕の中へまた這入ったらしかったが、続いて落ちて来る照明弾の音響で、またのこのこ出て来ると、
「お母アさん。」
「こらッ。来るなッ。」
呶鳴るたびに雨戸の外から足音は遠のいたが、いよいよ今夜は無事ではすむまいと私は思った。

この夜のことを思い出し、「あのときは、おかしかったね。お前の病気の夜さ。」と「私」が言い、「そうそう。あのときは、おかしかったわ。」と妻も思わず顔を上げて笑うのだが、結果的に生き残ったからこそ「おかしかった」という言葉で振り返ることができるのであって、一歩間違えば家族の誰か

が命を落としていても不思議ではない。どちらが生の側になるのかはわからないが、壕に入っているか否かによって生死が分れる可能性があったことが想起される場面である。さらには、「今夜は無事ではすむまい」という言葉の先にこの家族は含まれず、別の場所で別の家族が犠牲になったはずであることが示唆されている場面であるとも言える。「あの壕の中の二人さえ助かれば」と考えて引かれた生死の境は存在せず、家族四人はそろって生の側に踏みとどまった。その一方で間違いなくこの夜、同じ東京の住民が「焼けたもの」と「焼け残り」に分かたれ、両者の間に「不通線」が引かれたはずなのだ。

このように考えてみたとき、改めて確認しておかなければならないのは、「不通線」は「私」と「この村の人たち」の間だけにあるものではないということである。焼け残った東京の家と塀の外の世界との間の不通線。先に疎開した「妻」とぎりぎりまで東京に残っていた「私」との間の不通線。東京に一時的に戻った長男と山形に残った夫妻との間の不通線。酒一升が三十円の農村と三百円の東京との間の不通線。樺太に出征している長男と参右衛門夫妻との間の不通線。「夜の靴」には実にさまざまな不通線が明示的、暗示的に描き込まれている。それはまるで、被災地と被災地外、福島県内と県外、帰還困難区域・居住制限区域・避難指示解除準備区域といった形で引かれた東日本大震災後の「不通線」を想起させる。そしてさらに言えば、福島第一原発からの距離や放射性物質の影響の大小、原発村との関係の濃淡、津波による被災の有無、被災地に留まり続けた否か、十分な補償を受けられたかどうかなど、きわめて多様な「不通線」によってばらばらになってしまった震災後の現在と近似している。「焼けたもの、焼け残り、出征者や、居残り組、疎開者や受入れ家族、など幾多の間に生じている無感動さの錯綜、重複、混乱が、ひん曲り、捻じあい、噛みつきあって、喚わめきちらしている」という様相を見つめる「夜の靴」の眼差しの中には、「震災でぼくたちはばらばらになってしまった。」（8）と書いた東浩紀が見た二〇一一年の日本にも通ずる、共同体験や共通理解の不可能性を感受する心性があらわになっているのである。

しかし、食料の入手が困難であることや強盗がさかんに出ることを手紙で知り、「いやね。東京強盗ばかりですって。」と妻が嘆じる場面など、断片的に東京の様子が記されることはあるが、疎開日記という体裁をとる「夜の靴」の叙述が東京の現実に深く踏み込むことはない。疎開先の農村の風景を描いた「夜の靴」の世界にとって、焼け野原の東京は言わば

〈空所〉として存在している。敗戦後に書かれた「夜の靴」は、語り得ぬものを語らないままに浮かび上がらせることを企図したテクストとして読むことができるのである。

だとすれば、次のような描写には、敗戦後という時空を生きる読者の想像をかき立てる〈空所〉があると見なすことができる。

外国から帰って来たとき、下関から上陸して、ずっと本州を汽車で縦断し、東京から上越線で新潟県を通過して、山形県の庄内平野へ這入って来たが、初めて私は、ああここが一番日本らしい風景だと思ったことがある。見渡して一望、稲ばかり植ったところは、ここ以外にどこにもなかったからだった。その他の土地の田畑には、稲田は広くつづいても中に種種雑多なものが眼についたが、穂波を揃えた稲ばかりというところはここだけだった。この平野の、羽前水沢駅という札の立った最初の寒駅に汽車が停車したとき、私は涙が流れんばかりに稲の穂波の美しさに感激して深呼吸をしたのを覚えている。

十年前に外国から帰ったときの車窓からの風景を想起する場面である。引用の直後には、「私は今そこにいるのだ。（中略）まったく十年の後に行くところのなくなった私は、偶然こんなところへ吹きよせられようとは、これが私にとっての戦争の結果だった。」と書かれていて、「種々雑多なもの」をまじえながら稲田が広く続いている十年前の車窓からの光景は、敗戦の年に再び庄内平野にやって来たときに「私」が見たであろう車窓からの光景と、言わば範列関係に置かれている。言い換えれば、敗戦の年の車窓の光景は、「あの大きな東京」と同じように〈空所〉として存在している。車窓からの光景として敗戦後の読者が思い描きうるのはおそらく、国家総動員体制の中で軍事色に染まった沿線と緑豊かな山野、あるいは空襲で荒廃した市街地と国破れてなお粛々と耕作が続けられている農地のコントラストだったのではあるまいか。もちろん現実的には、上越線から羽越本線へと至る沿線地域で空襲の被害を受けた都市は、それほど多くはない。しかし、十年前に見た「稲の穂波の美しさ」という表現の〈空所〉として読者の脳裏に生成されるのは、間違いなく焦土と化した東京や荒廃した国土のイメージである。

さらに言えば、敗戦後の車窓から見えたであろう想像上の光景は、福島第一原発事故による通行止めが三年半ぶりに解除された国道六号線を車で走ったときに見えるであろう光景とも似ている。国破れてなお美しい山野の至るところに戦争

の傷跡が残る国土のイメージは、宮城県仙台市から福島県いわき市を経て東京都中央区へと至る数多の「不通線」によって寸断された太平洋沿岸地域を縦断した時に見える光景とも似ている。かくして「夜の靴」の〈空所〉には、人々の心をばらばらにしてしまうような敗戦の荒廃や混乱だけではなく、およそ七十年の時を隔てた読者を囲繞する震災後の現実も浮かび上がることになるのだ。

※「夜の靴」の引用は、『定本横光利一全集　第十一巻』（一九八二年五月・河出書房新社）による。ただし、漢字は現行の字体を用い、仮名遣いも新仮名遣いに改めた。

注

（1）敗戦後文学としての「夜の靴」については、「横光利一と敗戦後文学」（『現代文学史研究』第三集、二〇〇四年十二月）でも論じた。本稿はその補論にあたる。

（2）茂木雅夫「横光利一―『夜の靴』―」。神谷忠孝編『日本文学研究大成　横光利一』（国書刊行会、一九九一年八月）。初出は、森山重雄編『日本文学　始原から現代へ』（笠間書院、一九七八年九月）。

（3）黒田大河「『夜の靴』―〈敗戦〉という『不通線』」（至文堂、『国文学　解釈と鑑賞』二〇〇六年六月）。

（4）西尾宣明「〈敗戦〉と知識人―『夜の靴』をめぐる覚書」（横光利一文学会、『横光利一研究』第五号、二〇〇七年三月）。

（5）玉村周「夜の靴」（至文堂、『国文学　解釈と鑑賞』一九八三年十月）。

（6）日置俊次「『夜の靴』―芭蕉、ヴァレリー、そして『不通線』」（翰林書房、石田仁志・渋谷香織・中村三春編『横光利一の文学世界』、二〇〇六年四月）。

（7）十重田裕一「横光利一の著作に見るＧＨＱ／ＳＣＡＰの検閲―『旅愁』『夜の靴』『微笑』をめぐって」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』57、二〇一二年二月）。

（8）東浩紀「巻頭言」（合同会社コンテクチュアズ、『思想地図β vol.2 震災以後』、二〇一一年九月）。ただし、「ばらばらになってしまった。」というよりはむしろ、「ばらばらであることに気づいてしまった。」と言うべきなのかもしれない。

（のなか・じゅん）